

ブログにおける言いさし文

林 茜茜

1. 研究目的

1-1 研究背景

日本語の学習に関しては音声、語彙、文法等、さまざまな分野がある。現在日本にいる留学生は日本文化を味わいながら、日常的にたゆみなく努力しているが、目に入った日本語と耳に入った日本語に最後まで言い切らない、いわゆる言いさしの現象が少なくないことに気づく。しかし母国で日本語を勉強し始めたときはほとんど「です」、「ます」体ばかりだったので、どうして最後まで言い切らないのか、なぜ文の形は不完全なものが意味的には不完全ではないのか、なぜ日本語の言いさしは行われるのか、言いさしはどのようになされているのかという疑問におつかる。本稿ではこの問題について日本語教育では扱わないのか、これからの日本語教育ではどうすればよいのかについて明らかにしたい。

1-2 中国語と日本語の語順の違い

中国語と日本語では基本的な違いが文法に存在する。普通は、中国語の述語は主語のうしろにある。目的語は述語のあとにある。しかし、日本語では、述語は最後にあり、目的語は述語の前に置く。だから、日本語は文の最後まで読まなければ、話し手の伝えようとする意味及び意図を理解できないことが多い。これは日本語の‘文末決定論’（李素楨 1999：72）としてとらえられている。

1-3 言いさし文の存在

ことばはコミュニケーションの道具である。日本社会の中では円滑なコミュニケーションを行うために、言いさしが大きな役割を果たしている。「用事がありますので…」 「もしもし、田中ですが…」等、このような途中で止め、最後まで言い切らない表現は日本語の中にたくさん存在している。日本語学習者に完全に理解されるようにするため、言いさしについての研究を通して言いさし文の機能を明らかにする必要がある。本稿ではこの問題について、研究していきたい。

2. 先行研究

日本語学習者には「言いさし」表現は日本語をかなり理解するようになるまではずっと大きな壁である。この壁を越えられるようにするために、多くの研究者が「言いさし」表現に関する研究をしてきた。「言いさし」の定義、「言いさし」の原因と必然性、「言いさしに関わる省略」、「言いさし」の機能と効果などに関する先行研究がある。ここで触れておきたい。

2-1 「言いさし」の定義について

佐藤（1993）の「言いさし」についての定義を参考にしたい。

話し手にとって伝達すべき内容が明白であるにもかかわらず話し手自身によって文が中断されていて、しかもその後に来るべき内容の文言が会話の中の他の部分に見られず、その場の状況から自明でもない場合である。

2-2 「言いさし」存在の原因と必然性に関する先行研究

まず、金田一（1991）は「日本人の心づかい」と「日本語の省略表現」に次のように述べている。

電話では「もしもし」と言いますと、相手は「田中ですけれども」と言う。「田中ですけれども」と、なぜ「けれども」をつけるのかということになりますが、これは、そのあとに「どういうご用でしょうか」という言葉が省略されているのです。そのために「田中です」と切るよりもその方が丁寧だ、ということになります。

上の見解から見ると、言いさし表現は日本語の特徴の一つである。言いさし表現はその民族の歴史に残ったもので、必然性があると考えられ、日本の歴史と日本の社会に合う日本民族なりの表現であると言える。

次に、中山（1985）「ぼかしの構造——日本語の表現心理」は下記の見解を述べている。

日本人は人と人のコミュニケーションに際して、お互いに相手の感情の動きに気を配り、できるだけ相手の意に沿った形でコミュニケーションしようと心掛ける。従って、相手の意に沿わぬ事柄を伝達しようとする場合、婉曲であいまいな表現をとることによって相手の感情を傷つけることをできるだけ避けようとするのである。このように、日本人のコミュニケーションはこうした自他の感情の動きへの過剰ともいえる配慮から、「相手に合わせる」コミュニケーションを原則

とし、不一致はほかす、というパターンをとるのだと思われる。

また、生田（1997）は、ポライトネスの理論から言いさし表現の存在の原因と必然性を分析している。

ポライトネスとは、人間関係を維持するための社会的言語行動である。人間には面子に係わる欲求があり、相互の人間関係の維持を望むならば、それを互いに脅かさないように行動（言語使用）しようとする。それがポライトネスである。ポライトネスは、当事者同士の互いの面子の保持、人間関係の維持を慮って円滑なコミュニケーションを図ろうとする社会的言語行動を指す。

生田（1997）はポライトネス理論——互いに面子を保持する角度から、互いに面子を脅かさないように、コミュニケーション及びコミュニケーションを通して人間関係をスムーズにするために、言いさし表現存在の必然性と重要性を明らかにした。

最後に、水谷（1999）はこう述べている。

言いさし表現と切り口上の表現を比べながら、その結果として、文は心のうちで完成させる。心理的な共存意識の影響で、特定の相手、特定の場面の中で、文は最後まで言い切らなくても、心を通して意図を伝え、コミュニケーションを達成することもできる。

水谷（1999）はある程度話しことばの規則及び「共話」の場面から、言いさし表現の存在は自然な会話に大きな役割を果たしていることを明らかにした。話し手と聞き手は親しい関係で、最後まで言い切る必要がなく、途中で止め、うしろの部分あるいは言われていない部分は互いが心が通じているから、完全に理解される。このような表現はわざわざ最後まで言い切った切り口上の表現よりずっと自然で日本語らしい表現である。

2-3 言いさしの方法についての先行研究

2-3-1 省略の面から

まず、尾上（1973）「省略表現の理解」はこう述べている。

言語における省略とは、伝達内容の一部分を言葉に出しては言わず、聞き手の状況理解にゆだねることである。その意味ですべての言語表現は、たとえ文法的に完備した文の形をとっていても、そのものとしては本質的に省略を含んでいるといわねばならず、逆に言えば、聞き手に状況が理解され、したがって文の意味内容が正当に理解される限り、形の上でいかに不備であろうとも、十分な表現なのである。しかも、聞き手に正当に理解される限り、形の上で省略が大きければ大きいほど、話し手の言表意図、態度は強く、くっきりと表現されることに

なる。実はそういう省略によってこそ、言表意図、態度まで含めた密度の高い伝達が可能になっているのである。

次に、久野（1978）は、省略の原則に関する見解を述べている。

「省略の根本原則」というのは、省略されるべき要素は、言語的、あるいは非言語的文脈から、復元可能（recoverable）でなければならない。より新しい（より重要な）インフォメーションを表わす要素を省略して、より古い（より重要度の低い）インフォメーションを表わす要素を残すことはできない。

また、神尾（1990）は「新、旧情報および省略」にこう述べている。

<新情報>とは、話し手または聞き手が目下処理中の情報であり、それゆえ未だ認知体系の一部として定着していない情報であるとしよう。これに対して、<旧情報>とは、話し手または聞き手の認知体系の中に既に定着した情報であり、したがって認知体系内に保持されているので、先行文脈が与えられれば直ちに復元し得る情報であるとしよう。すると、新情報の部分を残して旧情報の部分を省略しても、旧情報は復元可能であるため理解に支障は生じないが、旧情報の部分を残して新情報の部分を省略すると、処理中の新情報の部分が復元できず理解に支障を来すと考えられる。

2-3-2 関連性理論の面から

今井（1995）は、関連性理論の角度から見解を述べている。

関連性理論では、聞き手の認知環境に変化を生じさせることを目的として発せられ、かつその目的を達成する発話を指して関連性（relevance）を持つと定義する。発話を解釈することによって得られる認知的効果が大きいほど、その発話の関連性は高い。発話を処理（＝解釈）するコストが高いほど、その発話の関連性は低い。

2-4 言いさし表現の機能と効果に関する先行研究

まず、曹英南（2000）は、「けど」で終わる発話の語用論の研究——「言い終わり」の「けど」を中心に——というテーマの論文で、このように述べている。

「言い終わり」の「けど」とは、話者の「けど」で終わる発話を聞き、話の前後関係から何かを補って考えなくても話者の発話内容が分かるものを「言い終わり」の「けど」とする。「言い終わり」の「けど」がどのような状況で現れるか、帰納的な方法により「発話緩和」、「発話補完」、「発話断定回避」、三つの談話機能がある。

羅福順（2003）は、「接続助詞で終わる言いさし表現に関する語用論的考察—日韓の会話文の考察を通して—」において、ポライトネス理論を引用して、次のように述

べている。

日本語では相手になにかを勧める時、話し手は婉曲な表現をよく使う。状況によって勧めが相手の利益に繋がる場合もあるし、話し手の利益に繋がる場合もある。いずれも話し手は状況を提供したり、条件を提示したりして結論を相手に委ねる婉曲な表現をよく使う。言いさし表現としての勧誘の表現が情報を提示したり、情報を与え相手に判断を委ねる働きかけの機能を持っている表現であるならば、断りや言い訳表現は話し手の意思や判断を相手に伝える表現であり、この場合も婉曲表現がよく使われる。言にくいネガティブなところは言わないで婉曲表現を使い、相手を配慮する気持ちを表したり、丁寧さを増したりすると考えられる。

最後に、内藤は内藤（1997）「『関連性理論』における話し言葉に現れる省略文の分析：試論—文末の省略部分を中心に—」及び内藤（1998）「『関連性理論』における話し言葉に現れる省略文の分析—文末省略部分の理解過程—」二つの論文において「関連性理論」を通して、文末の省略部分を復元しながら考察し、その研究結果を次のように述べている。

「関連性理論」とは「最小の処理労力で最大の文脈効果をもつ」ための理論である。人間はある時点で最も関連性のある「想定 (assumption)」を処理する。会話では、話し手聞き手ともに「最小の処理能力で最大に文脈効果をあげる」つまり会話では最大限の「関連性」をめざしていれば「省略文」を正しく理解できる。「関連性理論」の「文脈含意 (contextual implication)」が省略部分にあてはまる。

また、内藤（1998）では、以下のように述べている。

「文末が省略された文」を理解するためには、会話や発話者についての情報、知識を聞き手がほぼ熟知している場合は、ほぼ発話者の意図通りに理解できる可能性が高い。会話や発話者についての情報、知識を聞き手がどのくらいもっているかによって発話者の伝達意図の理解に「差」が出てくる。

上記の先行研究から見ると、言いさし文の存在は「和の精神」の歴史的な必然性を持っていると思われる。言いさし文はより自然なコミュニケーションを行うために適当な一つの表現である。言いさし文は話し手と聞き手の両者の面子を保ちながら、言いさしを行い、話者の発話意図を達成することを目的とし、「ボライトネス理論」や「関連性理論」などという配慮表現に基づいた一つの日本語らしい表現である。言いさし文は最後まで言い切らず、途中で止めるという特徴を持ち、形式的には不完全であるが、意味的には言いさした部分を相手に渡し、相手の注意を喚起して、話し手と聞き手が共同で文を完成させる表現である。

それで、先行研究は言いさし文の必然性と機能を論じている。コミュニケーションの中でスムーズに伝達意図を達成することにおいて、言いさし文はもっとも大きな役割を果たしているのではないと思われる。これからの研究は言いさし文を対象にし、先行研究に基づいて進めていきたい。

3. 本研究の調査

3-1 調査の対象

今回の調査は、ブログにおける言いさし文——「ケド」、「ガ」、「カラ」、「ノデ」、「ノニ」、「テ」、「ト」、「タラ」、「レバ」、「ナラ」、「シ」、「タリ」などの接続辞（注）で終わる——を対象とする。接続辞は終助詞ではないが、終助詞のように使われている。これらの文に注目し、文末の接続辞がどんな特徴を持ち、コミュニケーションの達成に対してどんな役割を果たしているのかを明らかにしたい。

（注）本稿の研究では「ケド」「ガ」「カラ」「ノデ」「ノニ」「テ」「ト」「タラ」「レバ」「ナラ」「シ」「タリ」を接続辞と呼ぶことにする。

3-2 調査方法

まず、インターネット上の130のブログから1019の言いさし文を収集した。この中の936の文は意味が成立し、今回の研究の有効データとして使用した。このデータについて分析する。次に、日常生活の中での自然会話のデータをも利用するため、現代日本語研究会編（1999）『女性のことば・職場編』を使用した。最初の2000の日常の会話の中から208の言いさし文を集め、その特徴と役割を分析した。最後に、ブログの分析結果と自然会話の分析結果を比較する。

3-3 調査の結果

3-3-1 ブログにおける調査結果

936の言いさし文において、一番多く使われている接続辞は「ケド」である。一番少ないのは「タラ」である。一番多く使われている接続辞から一番少なく使われている接続辞まで並べると表1のようになる。

3-3-2 自然会話における調査結果

『女性のことば・職場編』の中の最初の2000の会話から、208の言いさし文を集めた。これらの言いさし文の中のそれぞれの数と使用率は表2の通りである。数を見ると、自然会話の中でも、一番多く使われているのは「ケド」である。ただし、一番少ないのは「ナラ」である。

表1：(ブログにおける言いさし文のそれぞれの接続辞の使用状況)

接続辞	ケド	ガ	シ	テ	カラ	ノニ
数値	242	162	126	116	98	76
使用率	25.85%	17.31%	13.46%	12.39%	10.47%	8.12%
順位	1	2	3	4	5	6

接続辞	ノデ	ト	タリ	レバ	ナラ	タラ
数値	49	37	22	4	3	1
使用率	5.24%	3.95%	2.35%	0.43%	0.32%	0.11%
順位	7	8	9	10	11	12

表2：(自然会話における言いさし文のそれぞれの接続辞の使用状況)

接続辞	ケド	テ	カラ	ガ	ノデ	バ	ト	シ	タラ	ナラ	ノニ	タリ
数値	57	41	40	14	13	13	12	11	6	1	0	0
使用率	27.40%	19.71%	19.23%	6.73%	6.25%	6.25%	5.77%	5.29%	2.88%	0.48%	0	0
順位	1	2	3	4	5	5	7	8	9	10	11	11

3-3-3 本研究の位置付け

ブログにおける言いさし文の調査結果と自然会話における言いさし文の調査結果を比較してみると、二つの共通点がある。第一に、ブログでも、自然会話でも、一番多く使われているのは「ケド」である。第二に、ブログと自然会話には、「ナラ」と「タラ」が最後の2位で、二つとも使用例が少ない。共通点より、異なるところが著しく見られる。第一に、前者には、接続辞の種類は12種類ある。後者には、接続辞の種類は10種類しかない。この中の2種類「ノニ」と「タリ」は最初の2000会話の中で用いられていない。第二に、接続辞の使用率では、ブログと自然会話ではずいぶん違っており、具体的には表3に現れた通りである。自然会話よりブログの方が少なかったのは1以下の数字で表したものである。自然会話よりブログの方が多かったのは四つの接続辞である。「ノニ」と「タリ」の使用率は、自然会話のほうはゼロであった。表3のとおりである。

表3：(自然会話の使用状況と比べたブログにおける接続辞の割合)

(注)：自然会話での使用を1とする。

接続辞	ガ	カラ	シ	テ	バ	タラ
割合	2.57	0.54	2.54	0.63	0.07	0.04

接続辞	ト	ケド	ノデ	ナラ	ノニ	タリ
割合	0.68	0.94	0.84	0.67	—	—

上の結果から、自然会話より、ブログの方で多く使われている「接続辞」は「ガ」、「シ」、「ノニ」と「タリ」であることが明らかになった。

4. 結果分析

これ以降の研究対象は「シ」と「タリ」にしぼり、詳しく研究していきたい。まず、130のブログから収集した1019の言いさし文の中から、「シ」に関しては126の言いさし文が得られ、「タリ」に関しては22の言いさし文が得られた。正確な研究結果を得て、スムーズに研究していくために、上のデータを利用する他に、4月、5月のブログから「シ」と「タリ」で終わる言いさし文だけを探した。その結果「シ」で終わる言いさし文は14のブログから39例得られた。「タリ」で終わる言いさし文は14のブログの中に10例存在した。

4-1 「シ」と「タリ」の文法的及び意味的解釈

まず、文法的解釈から「シ」の用法は三つに分類される。①事柄を並列する際に、前の句の終わりに付けて、次の句に続ける。②前の句が、次の句の理由・原因となっていることを表す。③否定の推量を表す語の後ろに付いて、判断の成り立つ条件を表す。（『広辞苑』P.1128）。「タリ」の用法は三つに分けられる。①動詞の連用形に付いて「…たり…たり」の形で、動作の並行・継起することを表す。②同様のことが他にあるのを暗示しつつ、例示する。③命令・勧誘の意を表す。（『広辞苑』P.1681）。

4-2 「シ」と「タリ」の結果分析

以下において「シ」と「タリ」の二つの「接続辞」について、述語の品詞と前の形、「シ」と「タリ」の含意、文の構造、他の接続辞の機能と比べた「シ」と「タリ」の機能、四つの側面から、収集してきた208の言いさし文を分析していく。

4-2-1 述語の品詞と前の形における「シ」と「タリ」

まず、述語の主な品詞と「シ」、「タリ」の前の形から、「シ」と「タリ」で終わる言いさし文が形式的にどのような特徴を持っているのかを明らかにしたい。

4-2-1-1 接続辞前の品詞の面から

まず、「シ」の176の言いさし文の中に、例えば、「この時期は、海外旅行も高いし、人は多いし。」、「私と同じ干支だし、性格が似てるし」、「天気もいいし、動物たちもかわいいし」のような、一つの言いさし文が「～し」という構造を二つずつ持っているものがある。このようなものの中の一つの「～し」を一つの句節とすると、176の言いさし文の中に、「シ」に関する句節は202ある。この202の句節の中における、

述語の主な部分の品詞の数とそれぞれの使用状況は表4のとおりである。

表4：(品詞の面からの「シ」)

「シ」の前につく語の品詞					
品詞	動詞	形容詞	形容動詞(ダ)	名詞(ダ)	副詞(ダ)
数値	129	35	9	26	3
使用率	63.86%	17.33%	4.46%	12.87%	1.49%

次に、「タリ」の場合であるが、32の言いさし文の中に、「タリ」に関する句節が40ある。

さらに、この40の句節の中の述語の主な部分の品詞の数とそれぞれの使用状況は表5のとおりである。

表5：(品詞の面からの「タリ」)

「タリ」の前につく語の品詞					
品詞	動詞	形容詞	形容動詞(ダ)	名詞(ダ)	副詞(ダ)
数値	35	1	0	4	0
使用率	87.50%	2.50%	0	10.00%	0

つまり、「シ」で終わる176の言いさし文においては、動詞、形容詞、形容動詞、名詞、副詞など多くの品詞が現れたことになる。このうち、一番多く使われているのは動詞であり、次は形容詞と名詞であった。動詞が一番大きな役割を果たしていた。「シ」の状況と比べ、「タリ」で終わる32の言いさし文に関しては、「動詞」、「形容詞」、「名詞」は用いられていたが、「形容動詞」と「副詞」は現れなかった。このうち、一番多く使用されたのは「シ」と同じで動詞であった。「シ」と「タリ」は接続辞として、動詞との接触がもっとも頻繁であった。これからの日本語教育を考えるうえで示唆的である。

4-2-1-2 接続辞前の形の面から

「シ」と「タリ」の前には様々な形が出てきた。例えば、動詞の場合には、「朝ごはん食べたら、きっとまた昏倒するような眠気が来る筈なので、1時間はまた眠れるし」「ビジネス用品は全てそろってるし」等。形容詞の場合には、「天気もいいし、動物たちもかわいいし♪」等。形容動詞の場合には「部屋は広くてきれいだし。。。」等。名詞の場合には「暇人だと思われちゃうだろうけど、現に暇人だしね。」等。副詞の場合には、「走るたってバット振るにしたって、体が全然ついてこない。今現在、よたよただし。」等。更に、接続辞前の形における「シ」についての例文「～ている(ていた)」の場合には、「ビジネス用品は全てそろってるし」等。「助詞+だ」の場合には、「主催側は 会場借りてるだけだし」等。「～づらい」の場合には、「泥の中って、歩

きずらいし…」等が現れた。「～てくれる（くれた）」の場合には、「遊びにいいよって言ってくれたし」等。「～てしまう（ちゃう、過去形）」の場合には「神木君、最近すっかり声変わりしちゃったし…」等。「～だろう」の場合には、「前の座席にどっさり足上げていくわけにはいかないだろうし」等。

次に、「タリ」についての例文には、例えば、動詞の場合には「体がだるいし、原因不明の頭痛や腹痛になったり…」等。形容詞の場合には、「そんなに焦っても悩んでもなかったり（謎）」等という文があった。名詞の場合には、「式場の音だったり親戚のおばちゃんの声だったり…」等。「～て（い）たり」の場合には、「無駄にびっくりマーク使ったり。」等。「～ちゃったり」の場合には、「色んな競走馬を折り重ねて想像を膨らませちゃったり。」等という文が用いられていた。

これらをもとに、表6を作成した。

表6から見ると、「シ」の前に現れた形は多くて多種多様であるが、「タリ」のほうはそれほど多くなかった。しかし、この中で「～ている（ていた）」の使用状況（「タリ」の場合は「～ていた）」は「シ」と「タリ」ほぼ同率であった。このようなこと

表6：（「シ」と「タリ」前の形とそれぞれの使用状況について）

（注）：「割合」は「タリ」に対する「シ」の使用率の割合である。

「シ」と「タリ」の前の形及び変化率					
	「シ」	使用率	「タリ」	使用率	割合
～ている （ていた）	25	12.38%	5	12.50%	0.99
助詞+だ	3	1.49%	0	0	—
～てくれる （くれた）	4	1.98%	0	0	—
～てしまう （ちゃう、過去形）	4	1.98%	1	2.50%	0.79
～みたいだ	2	0.99%	0	0	—
～だろう	2	0.99%	0	0	—
～やすい	2	0.99%	0	0	—
～である	4	1.98%	0	0	—
～ [ん] です（だ）	6	2.97%	0	0	—
動詞+ない （なかった）	15	7.43%	0	0	—
その他	9	4.46%	0	0	—

（その他の中では、「シ」で終わる言いさし文は「～づらい」、「～どうしようもない」、「～らしい」、「～ないのだ」、「～てあげる」、「～てくれない」、「～てもらう（もらった）」、「～そうだ」、「～じゃあるまい」が一つずつ現れた。）

からみると、「シ」という接続辞は広く大きな役割を果たしているということが明らかになった。相対的には、「タリ」のほうは用いられている幅が若干制約を受けているように思われる。

「シ」と「タリ」で終わる言いさし文を接続辞前に現れた品詞及び形の角度から、観察してみた。その結果として判明したことは、「シ」と「タリ」の共通点は、二つとも主に動作に関する事柄を並列し、その後の同様の事柄を省略して暗示するという機能を持っているということである。「シ」と「タリ」で違ったところでは、第一に、前者が後者より多く使われていることがあげられる。同数のブログの中に、「シ」で終わる言いさし文は176であり、「タリ」で終わる言いさし文は32であった。「シ」の「使用率」は「タリ」の5.5倍であった。第二に、「シ」の前の品詞種類は多く、たくさんの品詞と接続し、「シ」で終わる言いさし文の使い道が多種多様であるということである。第三に、「タリ」と接続する品詞の種類は「シ」より少ないということである。32の例文のうち、動詞と接続した文は35（40の句節で計算する）にまでのぼった。動詞の使用率は87.50%を占めている。この数値から見ると、「タリ」の使い方では、動詞がはるかに優勢を占めている。前述の「シ」の「使用率」が「タリ」の5.5倍であるという結果から見ると、「シ」の使用範囲と意味領域は「タリ」より広いのではないかと思われる。

この結果から見ると、日本語学習者にとって、「シ」と「タリ」はこれからの日本語の学習の中で重視すべきものであるが、「シ」の学習に関しては、「タリ」より力を入れなければならないということが言えるであろう。また、「シ」と「タリ」の前の述語の品詞と形の分析結果から、動詞は重要な役割を果たしているということが明らかになった。動詞及び動詞のいろいろな使用形式についての学習はこれからの日本語教育においても、ますます重要である。これは日本語らしい日本語を勉強しようとする際の一つの前提と基準になる。

4-2-2 「シ」と「タリ」の含意についての分析

本稿では「シ」と「タリ」の含意として、伝える内容がプラスの意味であるのか、マイナスの意味であるのか、あるいは、プラスでもマイナスでもない中立的な意味であるのかにおいて文脈を通して観察している。

4-2-2-1 プラスの含意について

「シ」に関する言いさし文は、「シ」の先行文脈、接続辞「シ」、「シ」の後ろの省略された部分の三つで構成されている。接続辞「シ」は先行文脈と省略された後続文脈の間の架け橋である。先行文脈で伝えられてきた意味と後ろの暗示された意味との間の「シ」はどのような含意を持っているのか、架け橋の役割をどう果たしているのか、データの例文を分析しながら、明らかにしたい。

まず、「シ」については、プラスの意味を表す文は176文の中に全部で47文あった。例えば「部屋は広くてきれいだし。。。」、「何だか二人とも芸能人みたいに顔が小さいし細いし綺麗だし」等。それは、「シ」の前は「可愛かった」、「綺麗だ」、「うれしい」などのプラス的な意味の情報が入っているということである。このような文脈の後ろに「シ」をつけ、同様の事柄の存在や判断の原因・理由などを表している。そのため、プラスの意味に「シ」をつけるとき、この「シ」の含意としてはプラスの意味を表した上で、更にその意味を固めてはっきりさせることであると思われる。換言すれば、この場合の「シ」の含意というのはプラス的な意味を強調し、話者の満足感を強調して、聞き手、読者に話者のそのような気持ちを完全に伝えることであると言える。

4-2-2-2 マイナスの含意について

マイナスの意味を表す文は176文の内、全部で86文あった。例えば、「デブだし、短足だし、性格最悪だし…」、「泥の中って、歩きづらいし…」等。プラスの意味の例文と反対に、マイナスの意味の先行文脈に「シ」をつけると、そのマイナスの意味は更に強く表現できるようになると思われる。同時に、「シ」の後ろの省略された文脈は、必ずマイナスの事柄になる。また、マイナスの意味を表す文が先に理由、原因として現れる場合は、その後省略される内容としては、「シ」の前の文の結果、一般的なマイナスの事態が現れることを表す。ここでの「シ」の含意は、マイナスの意味を表し、更にマイナスの意味を強調し、同様（マイナス）の事柄と結果を暗示することであると思われる。

4-2-2-3 中立的な含意について

最後に、中立的な意味を表す文は全体の176文の中に43文あった。例えば、「過去にも豚汁作ったりそうめんゆでたりしたことあるし。」、「しばらく行かないって決めたし〜」等。これらの「シ」の前の先行文脈は、ただの事実・現象を表現し、プラスの意味でもマイナスの意味でもない、中立的な意味を表している。ここの「シ」の含意としても、先行文脈と一致し、中立的な意味を表すと言える。

4-2-2-4 「タリ」についての含意

「タリ」については、プラスの意味を表す文は32文の中に6文あった。例えば、「気持ちいいよねえ、朝風呂露天風呂でまったり」等。先行文脈はプラスな意味の情報を表し、「タリ」で終わる言いさし文は同様の事柄の列挙を言いさし、全体的にプラスの意味を表している。マイナスの意味を表す文は32文の中に16文あった。例えば「体がだるいし、原因不明の頭痛や腹痛になったり…」等。中立的な意味を表す文は32文の中に10文あった。例えば、「式場の音だったり、親戚のおばちゃんの声だったり…」等。マイナスと中立的な含意はプラスの含意と同じように、先行文脈により情報を導

入し、「タリ」で文を完成させ、同じ性質の事柄を省略してこの言いさし文を完成し、同時に、「タリ」の含意を先行文脈と合わせて生じることになる。「タリ」は「シ」と同じように先行文脈と言いさされた文脈の間の架け橋となっている。

つまり、先行文脈と省略された文脈の間の架け橋の役割を果たしている「シ」と「タリ」は含意として、プラスの意味、マイナスの意味、中立的な意味の三つを持っている。また、「シ」と「タリ」はセットメンバーを表すため、「シ」と「タリ」の含意及び「シ」と「タリ」の前の先行文脈、その後「シ」と「タリ」から推測される、省略された文脈との間に存在する内容は意味的に一致している。

4-2-3 「シ」と「タリ」の言いさし文の構造について

本稿における、「シ」と「タリ」の言いさし文の構造というのは、一つの文に句節をいくつ含んでいるかということである。言いさし文を一つの句節の場合と、二つ以上の句節を含む場合とに分けて分析していく。

4-2-3-1 「シ」で終わる言いさし文の構造について

「シ」で終わる言いさし文の176文は、二種類の構造の文に分けられる。例えば「当時はアンテナ等の関係でその通信方式は都市部でしか運送出来なかったですし」、「俺の目的地はもっと先だったのだが、日が暮れるまで時間もあまりないし」等、「～し…」という句節が一つしか現れない構造の文と「この時期は、海外旅行も高いし、人は多いし。」、「昨日は初夏の陽気ともあって暑いし、私も待ちくたびれるし…」のような、二つ以上の「～し、～し…」という句節を持っている構造の文である。この二種類の構造の文の使用状況について表7に示した。

ブログにおける「シ」で終わる言いさし文の構造に関しては、3点の特徴が見られる。第一に、176文の中で、二つ以上の事柄の文より、一つ的事柄しか持っていない文のほうが圧倒的に多い。第二に、二つ以上の事柄を持っている20文については、事柄の間の意味的關係は全部一致している。「シ」の前述部分がプラスの意味を表していれば、後半部分もプラスの意味を表す。中立の意味を表していれば、残りの部分も中立の意味を表す。マイナスの意味を表していれば、残りもマイナスの意味を表す。

表7：(文の構造及び比率)

接続辞	一つ的事柄	二つ以上の事柄		接続辞	一つ的事柄	二つ以上の事柄	
		一致	相反			一致	相反
し (176文)	156	20	0	タリ (32文)	24	6	2
比率	88.64%	11.35%		比率	75%	25%	

(注：この「相反」というのは全体的な文の意味ではなく、単語の意味に関するものである)

第三に、二つ以上の事柄の間に関係に関しては、同様の事柄の並列になっている。この点は辞書（『広辞苑』）による文法の解釈——「シ」は「同様の事柄を例挙する」によっても裏づけられる。

4-2-3-2 「タリ」で終わる言いさし文の構造について

「タリ」で終わる言いさし文32文の内、「タリ」の句節が一つしか現れていなかった文は24文であった。例えば「無駄にびっくりマーク使ったり。」等。換言すれば、一つの「～たり」という構造の文が全体の75%を占めている。もう一種類は「後はタバコ畑があったり、九州にも田んぼがあったり。」のような二つ以上の「～たり、～たり…」という構造の文であるが、これは8文で用いられ、全体の25%を占めている。

ブログにおける「タリ」で終わる言いさし文の構造に関しては、「シ」と同じように、3点の特徴が見られる。第一に、32文の中で、二つ以上の事柄の文より、一つの事柄しか持たない文のほうが圧倒的に多かった。第二に、二つ以上の事柄を持つ8文については、それらの事柄が意味的に一致しているのは6文であった。この6文の「タリ」は事柄を例示して、ほかの同様の事柄を言外に暗示している。第三に、二つ以上の事柄を持つ8文の内、並べられた語の間で反対の意味を表す文は2文であった。例えば「…聞いたり聞かせたり」、「…帰ったり…呼び出されたり」等のように、まったく反対の意味の語を使い、動作や状態の繰り返しを表している文である。しかし、これはプラス・マイナスの評価が逆ということではない。

ブログにおける「シ」と「タリ」で終わる言いさし文の構造及び特徴について分析してきた。その結果として、次のことが言える。第一、「シ」や「タリ」を使って述べる事柄は二つの場合より、一つの事柄の場合のほうが圧倒的に多い。第二、「シ」と「タリ」は同様の事柄を列挙し暗示する。第三、「シ」や「タリ」の前述部と後半の省略部分は評価的に一致している。

4-2-4 他の接続辞の機能と「シ」、「タリ」の機能の対比

まず、「ケド」で終わる言いさし文の機能に関しては成田（2001）が述べているように、6種類の機能がある。

第一、相手の質問に対する答えとして、今自分の言ったことが適当であったか（相手はこのような答えを期待していたのだろうか）という、話し手の気持ちを表す機能。第二、相手の発話から聞き手が間違っただ判断をしてしまったと、話し手が理解した時に、その間違っただ判断を正しいものにするために使われる機能。第三、直接的すぎる質問を柔らかく、遠回しにしたり、はっきりと言葉では表しにくい話し手の気持ちを、聞き手に効果的に伝える機能。第四、答えの文を「ケド」で終わらせることで、話し手が「ケド」の付いた文で言いたかった事と同時に、その文に隠された話し手の本当の気持ちを聞き手に効果的に伝える機能。ま

た、聞き手にとっては、文の最後に「ケド」が付くことにより、「ケド」の後ろに隠されている話し手の気持ちを推測する機能。第五、「ケド」で終わらせることにより、話し手の気持ちを一方的に伝えるのではなく、聞き手に発話権を渡し、聞き手の自由な判断でその後の発話を続けられるようにする機能。このような「ケド」の使い方は、岡田（1991）も述べているように、話し手が聞き手に省略部分を察してくれることを期待して、直接的な言い方をせず、聞き手の自由な判断で対応できるように曖昧でばかしたい場合に用いられる。日本人独特の心理によるものだと思う。第六、「ケド」で終わることにより、聞き手にとっては「ケド」が付かない言い切りの形と比較すると、話し手が遠慮がちに話している感じがするため、柔らかい印象を与える機能。話し手自身も、「ケド」で終わる表現をすることにより、遠慮がちに話しているという気持ちを伝えるのに役立っていると思われる。

次に、「…ガ」で終わる言いさし文の機能に関しては、佐藤（1993）に（「…ガ／ケド」が論じられているが、ここでは「ガ」だけを扱う）、「…ガ」の形で言いさしにされた発言における「ガ」の含意については、大きく二種類に分類できるとある。

第一類は、接続助詞が逆説を表す場合で、この場合、その含意は文脈によって異なる。第二類は、これが圧倒的多数を占めるが、接続助詞が前提的条件を示す場合で、ここでは「ガ」の含意は意向伺い、情報求め、了承求め、その他、すべて相手の反応への期待を伴うものとなる。後は、主な機能としては、第一、暗示的情報要求のサインの送信。第二、明示的情報要求に伴う禁忌侵犯の回避。第三、敬語の過剰使用の回避。第四、依頼や勧誘における目的達成の方略としての明示的情報要求の回避。第五、討論での turn 譲渡における turn-taking 強制の回避。「カラ」で終わる言いさし文の機能に関しては、北澤（1995）の以下のような見解がある。

「…カラ」には、会話の参加者が共有しているスクリプトを背景として相手が行動することがのぞましいという言外の意味が含まれていると考えられる。「…カラ」の直後に主節が生起していない場合、前後の言語的文脈を参考することによって主節の行方を明らかにすることができれば、語用論的推論は不要である。しかし、前後の言語的文脈からだけでは主節の復元が不可能な場合、語用論的推論によって言外の意味を明らかにする必要がある。

「ノニ」で終わる言いさし文の機能に関しては前田（1995）が述べているように、終助詞的なノニとして二つの機能がある。

第一、文脈上先行し省略されている後件に対して、阻害要因となる事態を提示する機能。そして、その阻害要因があるにも関わらず結果（後件）が生じていることに対して、話者の意外感・驚き・呆れ、恐縮感などを表すのが終助詞的なノニの意味である。こうした感情は、すべて前件と後件の結びつきに、話者が食い

違い感を感じているから生じる感情である。第二、終助詞的なノニのもう一つの重要な機能は、反事実的な条件文に付く場合である。条件文が裏にある予測を表し、それにノニがつくことによって、その予測が外れたことが示されている。

「タラ形・レバ形」で終わる言いさし文の機能に関しては白川（1995）が、下記のように述べている。

言いさしという表現形式に「完全文」とは独立した表現価値を認めながらも、その表現価値は、その形式の本来的に持っている意味そのものではないと考える。つまり、本来の意味と文脈情報とを手がかりにして算出される派生的な意味だと考える。まず、「タラ」による言いさしについては、聞き手不在発話では、「願望」、「危惧」を、聞き手存在発話では、「勧め」を表す；欠けているタラ節の帰結が問題になっているのではない。話し手は、タラ節の内容を想定しているだけであり、結果的に、タラ節の内容の実現それ自体に対しての話し手の評価的感情——良い・悪い——を表出している；「勧め」の用法は、「願望」の用法（＝表出）が聞き手にもちかけられて、働きかけに移行したものである。次に、「レバ」による言いさしについては、聞き手不在発話では、「願望」を、聞き手存在発話では、「勧め」を表す；「レバ」は望ましい帰結をもたらす条件として話し手が導きだしたものである。；文脈情報を手がかりに具体的な命題の影で復元できる場合もあれば、何か「望ましいコト」の存在が抽象的に暗示されるのみの場合もある。；聞き手がやろうと思えばできる動作をするということを望ましい帰結をもたらす条件としてもちかける」と、「勧め」になる。最後、タラ形とレバ形の使い分けについて、レバ形の方が適当な場合では、反事実仮定の願望；相手の意志に配慮した願望；聞き手の現状を変えようとする勧め；聞き手の願望を見越して是認する勧め。タラ形の方が適当な場合では、白紙の状態でも聞き手に動作を行うよう勧める場合。

「～テ」で終わる言いさし文に関しては高橋（1993）に、以下の見解がある。

第一、「～して」の形は働きかけの文を言い終わる形としても使われる。これは中止形から直接きたのではなく、分析形になった「して くれ」、「して ちょうだい」などの助動詞の部分がおちてできた、一種の依頼形である。第二、のべたてと、働きかけの区別を生じる原因は、おおまかに言えば、無意志動詞・形容詞・述語名詞と意志動詞との違いである。打ち消し動詞の中止形の場合、「しないで」は、ふつうは働きかけ、「しなくて」は、ふつうは、述べ立てである。第三、中止形による働きかけの用法としても一つ、レントゲン検査の「大きくいきをすって！はい、とめて！」のようなものがある。こっちの働きかけは中止形の本来の用法から直接きたものである。

以上、「ケド」、「ガ」、「カラ」、「ノニ」、「タラ」、「レバ」、「テ」で終わる言いさし文の機能を概観した。上記のそれぞれの接続辞で終わる言いさし文の機能から見ると、

言いさし文は文を和らげて、相手が応じてくれるように働きかける機能がある。言いさし文は単なる話し手の一方的な発話ではなくて、言いさされた文脈を相手に渡し、相手を喚起し、話し手と聞き手が共同で、発話意図を達成し、文を完成させるのである。なるべく直接的ではなく、言いさしを通して相手が協力してくれる範囲の中で、発話意図を達成する。これが言いさし文の機能と目的である。

言いさし文は「和の精神」と「均質性の高い社会」に生まれた日本語らしい表現である。コミュニケーションの中で言いさしの機能が生まれ、重要性が高められてきた。

本稿の結論として、「シ」と「タリ」で終わる言いさし文の機能を明らかにしたい。基本的にブログというのは話者（ブログ所有者）が自分の考えや意見などを述べるスペースであると思われる。そのため、ブログにおける言いさし文での、「シ」と「タリ」の機能は以下の四つに分類される。第一に、先行文脈を通してある情報を提供し、現れた先行情報に「シ」をつけることにより、話者（ブログ所有者）の意見は同様の情報になり、省略し、暗示することができる機能。例えば、「飲んでも飲まなくても眠れるときは眠れるし」、「私と同じ干支だし、性格が似てるし」など。第二に、先行情報が原因や理由の場合、その後ろに「シ」をつけることで、話者（ブログ所有者）の意見は結果として暗示される機能。例えば、「天気もいいし、動物たちもかわいいし」等。ここにはブログ話者の「今日はよかった、楽しかった」という結果を導く意図があるはずである。「ものすごく手間暇お金がかかってるし」等。これは「大事にしよう」という結果になるはずである。第三に、「タリ」は、先行情報がある動作を表し、その後ろに「タリ」をつけることにより、同様の動作の列挙を暗示することができる機能をもつ。あるいは、反対語の動詞を用い、その現れた状況を繰り返すことを暗示する機能をもつ。暗示された同様の動作と状況から、話者（ブログ所有者）の心境がそのブログを通し、表現できる。例えば「そんなこんな色々を聞いたり聞かせたり。。。」、「自分家に帰ったりまた電話で呼び出されたり」などに現れている。第四に、「シ」も「タリ」もセットメンバーを示す機能があるため、先行文脈、「シ」（「タリ」）、省略された文脈、の三つの部分の意味（評価）が一致する。例えば、プラスの含意については「告白してた女の子とか可愛かったし…」「気持ちいいよねえ、朝風呂露天風呂でまったり」等、マイナスの含意については「あと…話と違って待遇悪いし。」「体がだるいし、原因不明の頭痛や腹痛になったり…」等のような、プラスの文が話者（ブログ所有者）の満足している気持ちを表し、マイナスの文が話者（ブログ所有者）の不満を表すという機能を持っている。

5. 今後の展望

第一、今回の研究ではインターネットのブログと『女性談話』に基づき、研究してきた。今後の研究では、現在の日常生活に即し、場面と時間、人物を決めて、会話を録音し、実際のデータを収集するつもりである。質的には、日常生活から出発し、新しいデータを集めたい。量的には、豊富な用例を収集したい。つまり、自然会話を今後の研究の対象としていきたい。

第二、今回の研究では、先行研究の結果に基づき、「シ」と「タリ」で終わる言いさし文を対象とし、分析した。今後の課題としては、他の接続辞「ケド」、「ガ」、「カラ」、「ノデ」、「ノニ」、「テ」、「ト」、「タラ」、「バ」などで終わる発話が、どんな状況で使われているのか、どんな特徴と機能があるのかを明らかにしたい。今後の研究では、語用論的な観点からも明らかにしたい。

第三、日本語教育の分野において、言いさし文は学習者にどのように教えていくべきなのかを考えたい。特に中国人の学習者を対象とした言いさし文の誤用例を研究対象とし、分析していきたい。より自然な日本語をマスターすることは、日本の社会の中で自然にコミュニケーションし、日本文化を深く理解するために必要不可欠である。日常会話で多く用いられる言いさし文の導入はその一助となるであろう。中級と上級の日本語教材の中で言いさし文を徐々に用い、学習者に日本語らしい表現を把握させるにはどうすれば良いのか考察していきたい。

〈参考文献〉

- ・ 生田少子 (1997) 「ポライトネスの理論」『言語』1997-6 大修館書店
- ・ 今井邦彦 (1995) 「関連性理論の中心概念」『言語』1995-4 大修館書店
- ・ 内田安伊子 (2001) 「『けど』で終わる文についての一考察——談話機能の視点から」『日本語教育』109号 日本語教育学会
- ・ 尾上圭介 (1973) 「省略表現の理解」『言語』1973-2 大修館書店
- ・ 金井典子 (1996) 「含意の『が』とその慣用化——ポライズとネスの観点から」『豊橋技術科学大学 曇雀野』18
- ・ 神尾昭雄 (1990) 『情報の縄張り理論—言語の機能的分析』大修館書店
- ・ 北澤尚 (1995) 「主節の省略と以外の意味—『から』で言いさす文—」『国学院雑誌』
- ・ 金田一春彦 (1991) 『日本語の特質』日本放送出版協会
- ・ 久野暉 (1978) 『談話の文法』大修館書店
- ・ 現代日本語研究会編 (1999) 『女性のことば・職場編』ひつじ書房
- ・ 佐藤勢紀子 (1993) 「言いさし『…が／けど』の機能—ビデオ教材の分析を通して—」『東北大学留学センター紀要』1
- ・ 白川博之 (1995) 「タラ系・レバ系で言いさす文」『広島大学日本語教育紀要』5
- ・ 曹英南 (2000) 「『けど』で終わる発話の語用論の研究—『言い終わり』の『けど』を中心に—」『言

語文化と日本語教育』19 お茶の水女子大学

- ・高橋太郎 (1993) 「省略によってできた述語形式」『日本語学』1993-9
- ・寺村秀夫 (1991) 『日本語のシンタクスと意味Ⅲ』版元くろしお出版
- ・内藤晶子 (1997) 「『関連性理論』における話し言葉に現れる省略文の分析：試論—文末の省略部分を中心に—」『文教大学国文』26
- ・内藤晶子 (1998) 「『関連性理論』における話し言葉に現れる省略文の分析—文末省略部分の理解過程—」『言語科学研究』4
- ・中山治 (1985) 「『ほかし』の構造—日本語の表現心理」『言語』1985-12
- ・永田良太・大浜るい子 (2001) 「接続助詞ケドの用法間の関係について—発話場面に着目して—」『日本語教育』110号 日本語教育学会
- ・成田麻衣子 (2001) 「『けど』で終わる文—談話表現を中心に—」『日本語教育研究紀要』
- ・前田直子 (1995) 「逆説を表す『～のに』の意味・用法」『東京大学留学生センター紀要』1995-5
- ・水谷信子 (1999) 『心を伝える日本語講座』研究社出版
- ・羅福順 (2003) 「『接続助詞で終わる言いさし表現に関する語用論的考察』—日韓の会話文の考察を通して—」『応用言語学研究』5